

農学教育における現場を知ることの大切さ

神崎 浩

岡山大学農学部 学部長

私は農学の農芸化学というフィールドで研究を続けてきたこと、その分野の教育ができていることを現時点では大変幸せに思っている。今から30年以上前の高校生の頃、数学・物理・化学が得意科目で理系進学を考え、生き物が好きだったので生物を扱う学問がしたいと思って農学部に入學した。理学部の生物学科ではなく農学部だったのは近隣に農家があったことも理由の一つのように記憶しているが、その当時は『何となく』という感じだったと思う。『何となく』という表現は自己主張がなく、決断力がないという風に受け取られがちであるが、その後の私の人生においても『絶対にこちらの選択で』という形でなく『何となく』道を選んできた。

農学部長としての立場で教育や研究を考えるようになった今、学生に『何となく』道を選びなさいとは直接は言えない立場であるが、農学部に通う学生にはその感覚をわかってもらいたいと思っているし、農学という学問はその感覚を身につけやすいのではと考えている。ここで私が思う『何となく』とは、いろんな選択肢がある時に、自分が一番良いと思う選択肢のみでなく、その時はベストでないと思っても『何となく』そちらがよいように思う選択肢も考慮に入れる感覚をもつということである。

農学は人類が生命活動を維持していくために必要な活動に関わる学問である。従って、農学は課題克服型の学問であり、人間活動の Needs から生まれてきた学問とも言え、昔から産学連携すなわち現場と密接な連携をしてきた。同じ生物を扱う理学部の生物学が生命の真理を探究するところから発生してきた学問と捉えると農学はそれとは異なることが分かる。その課題克服という点から考えると農学教育においては農の現場を知ることが不可欠であるという結論に至

る。現代のサイエンスの発展と深化により、ミクロな視点で物事を追求することが農学でも求められているが、必ずマクロな視点を持ちつつ研究を進めることを忘れてはならず、その意味で農学部における教育においてはマクロ・ミクロの両方の観点から物事を考えることの重要性を説くことが必要となってくる。いわゆるミクロサイエンスは座学が中心となるが、マクロサイエンスにおいては座学に加え、現場を理解する実習や演習が不可欠である。

岡山大学農学部では1学科制を20年以上続けてきており、少なくとも1回生の時には広く浅く農学を勉強する。さらに農場を使った演習や実習科目が幾つか設定されており、農家の講演を聴く講義、農政局の職員が担当する講義、農家における演習などを通じて、「現場を知る」、「現場の人を知る」という機会を多く設けている。こういう科目の設定はあらゆる農学系の大学に共通する項目である。このような教育を受けた学生の中から、自分が卒業論文研究や修士論文研究で行った研究分野とは異なっている分野で「つぶしがきく」（小学館大辞泉には【《金属製品は、溶かして別の物にすることができるところから》それまでの仕事をやめても、他の仕事ができる能力がある。】と記されている）社会人が多く輩出されてきていると私は分析している。すなわち農学は「つぶしがきく」社会人を育ててきた実績があり、その実績を継続するためには、現場を知る科目がこれからも重要である。

現在、中央教育審議会から出されている『学士課程教育の再構築に向けて』報告に基づいて、どこの大学でもカリキュラム改革が様々検討されている。その報告の「今なぜ学士課程教育か」の項目では最初に次のように述べられている。

ア グローバルな知識基盤社会、学習社会を迎える中、我が国の学士課程教育は、未来の社会を支え、よりよいものとする「21世紀型市民」を幅広く育成するという公共的な使命を果たし、社会から信頼に応えていくという必要があること。

イ 高等教育そのもののグローバル化が進む中、明確な「学習成果」を重視

する国際的な流れを踏まえつつ、我が国の「学士」の水準の維持・向上、そのための教育の中身の充実を図っていく必要があること。

- ウ 我が国に顕著な少子化、人口減少の趨勢の中、学士課程の「入口」では、「大学全入」時代を迎え、教育の質を保証するシステムの再構築が迫られる一方「出口」では、経済社会からイノベーションや人材の生産性向上に寄与する事が強く要請されていること。
- エ 政策的には、大学間の競争の促進によって教育活動の活性化が図られてきたが、教育の質の維持・向上を図る観点からは、大学間の「協同」が併せて必要となってきたこと

ここに述べられていることは、どのような農学部教員でも納得できることであり、大学として改革が必要なことは認識しておられると思うが、私は、教育は数値で判断できるものではなく、数値にまどわされない教育システムの構築が必要不可欠と考えている。農学教育がこれまでに行ってきた現場を重視する考え方は「つぶしがきく」学生を世の中に送り出していくためには大変重要と思う。その意味で、農学部としてこれまで実施してきた意味のある教育を再度見直し引き続き「他に惑わされずぶれの無い」教育を続けていくことが今問われていると思う。新しい改革は大事であるが、これまで行ってきた農学教育に充分価値の高いものがあり、それらを現代にマッチした形で継続していく「農学教育温故知新」が望まれている。

私の恩師、京都大学名誉教授山田秀明先生から学生時代に産学共同研究の成功の秘訣は「Mutual Interest(相互利益)」ではなく「Mutual Respect (相互尊重)」であると伺った。農学教育における現場の重要性は、他の人を知ることであり、すなわち「Mutual Respect」を身につけることであると私は思う。そのような学生はきっと「つぶしのきく」人材としてさまざまな分野で活躍してくれるものと信じている。最初に述べた「何となく」決断することは「つぶしがきく」人間であれば可能なことだと思っており、そのような人材育成を続けていきたいものである。